

昭和二十四年八月二十五日發行（第三種郵便物認可）

（通第一九五号）

目

歎異抄第十二章講話……………近角常觀……………(1)

近角常音先生聞書……………花田正夫……………(9)

次 自然法爾について……………波岡茂輝……………(12)

異常氣象と友人の病没に思う……………福田鉄雄……………(15)

慈光

第十七卷 第八号

歎異抄第十一章講義

近 角 常 観

一、経釈を読み学せざるもがら、往生不定のよしのこと。この条すこぶる不足言の義といつべし。他方真実のむねをあかせるもろもろの聖教は本願を信じ、念仏を申さば、仏になる、そのほかなにの学問かは往生の要なるべきや、まことにこのことわりにまよいはんべらんひとは、いかにも／＼学問して、本願のむねをしるべきなり。経釈を読み学すといえども聖教の本意を心得ざる条もとも不便のことなり。一文不通にして経釈のゆくちも知らざらんひとの、となえやすからんための名号にておわします、ゆえに易行という、学問をむねとするは聖道門なり、難行となづく、あやまて学問して名聞利養のおもいに往するひと順次の往生いかにあらんずらんという証文もさうろうぞかし。

当時専修念仏の人と、聖道門の人と諍論をくわだて、わが宗こそ勝れたれ、ひとの宗はおとりなりというほどに、法敵もいできたり、謗法もおこるなり。これしかし

ながら、みずからわが法を破謗するにあらずや。たとい諸門こそりて、念仏は甲斐なき人のためなり、その宗あさしいやしというとも、さらに争わずして、われらがごとく下根の凡夫、一文不通の者の信すればたすかるよしうけたまわりて信じそうらえば、さらに上根の人のためにはいやしくとも我等がためには最上の法にてましますたとい自余の教法はすぐれたりとも、みずからがためには器量およばざればつとめ難し、われもひともし生死を離れんことこそ諸仏の御本意にておわしませば、御さまたげあるべからずとて、にくい気せずば、たれのひとかありてあだをすべきや。かつは諍論のところにはもろ／＼の煩惱おこる、智者遠離すべきよしの証文さうろうにこそ。故聖人の仰せには、この法をば信ずる衆生もあり、そしる衆生もあるべしと、仏ときおかせたまいたることなれば、われはすでに信じたてまつる、またひとありてそしるにて、仏説まことなりけりとしられさうろう、し

かれば往生はいよ／＼一定と思いたまうべきなり。あやまてそしるひとのさうらわざらんこそ、いかに信するひとはあれども、そしるひとの無きやらんとおほえさうらいぬべけれ。

かく申さばとて、必ずひとにそしられんとはあらず、仏かねて信謗ともにあるべきむねをしろしめして、ひとの疑いをあらせじと説きあかせたまうことを申すなりとこそさうらいしか。

いまの世には、学問してひとのそしりをやめん、ひとえに論議問答をむねとせんとかまえられさうろうにや。学問せばいよ／＼如来の御本意を知り、悲願の広大のむねをも存知して、いやしからん身にて往生はいかかなんととあやぶまんひとにも、本願には善惡淨穢なきおもむきをも説き聞かせられさうらわばこそ、学生の甲斐にてもさうらわめ。たま／＼なにこころもなく本願に相応して念仏する人をも、学問してこそななどと云いおどさるること、法の魔障なり、仏の怨敵なり、みずから他力の信心かくるのみならず、あやまて他を迷わさんとす、謹しんでおそるべし、先師の御こころにそむくことを、かねてあわれむべし、弥陀の本願にあらざることを。

此章は学問をして経釈の行路がわからねばならぬという

異義に對して、懇々とその不心得を論したまいて、絶対の信仰は少しも学問の要なきことを示された章である。

前章に弁ぜし如く、律法主義は学者風に流れるか、殊勝風に陥るかの二者いずれかである。この章はその学者風の律法主義に對してその誤りを正さるのである。歎異抄製作の當時、たしかにその弊はなだしかりしものと見えて第二章の

「しかるに念仏よりほかに往生の michi をも存知し、又法門等をもしりたるらんとところにくくおほしめしておわしましてはんべらんは大きなあやまりなり。もししからば南郷北嶺にもゆゆしき学生たち多くおわせられてさうろうなれば、かのひとひとにあいたてまつりて往生の要よく／＼きかるべきなり」とあるをはじめとして、

「念仏はまことに浄土にうまるたねにてやはんべらんまた地獄へおつる業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり」との断言、又結章にも

「経釈のゆくちをも知らず、法文の浅深をこころえわけたることもさうらわねば、云々」

など、当時学者風の律法主義の行われてあつたことは明らかである。その内容は前章の署名別信計の如きである。全

体学問や道理がよく立つ間は、決してただ念仏して弥陀にたすけられる絶対信仰に入れるはずはない。学問や議論が生きている間はお慈悲一つというようにならぬのである。お慈悲ばかりと信ぜられたときは一切経を五遍読まれた法然上人も、往生のためには何の益にも立たぬ、一文不通の愚者でもお慈悲一つで十分である。否学問の有無にかかわらず、お慈悲一つと頂けねば、専修念仏とは申されぬ。全体学問を生かして得意気にするは何のためか、名聞利養、議論問答のためである。名聞利養、議論問答のための念仏や信心なれば、真に菩提を求むる者ではない、たしかに邪雑である、疑情である。

聖人の信巻、菩提心の下に曰く、

「横堅の菩提心、そのことば一つにして、その心ことなりといえども、入真を正要とす。真心を根本とす。邪雑をあやまりとす、疑情を失とするなり。忻求淨刹の道俗深く信不具足の金言を了知し、ながく聞不具足の邪心を離るべきなり。」

とある。而して、信巻下、及び化巻上に涅槃經を引きて曰く「又またこの六部經を受けて、論議のための故に、勝他のための故に、諸有のための故に、持説誦説す、この故に名づけて聞不具足となすなり」

と仰せられたが、実にこの章が正さんと欲する学者念仏は

この聞不具足の誤りである。真の聞其名号の信者は如何に他より淨論を持ちかけても議論しかけても、却て相手とならず、唯弥陀を信じ、念仏を喜ぶの外なきことを長々と示されたる章である。本文について詳かに味わして頂かねばならぬ

「經釈をよみ学せざるもがら往生不定のよしのこと、この条すこぶる不足言の義といつべし、他力真実のむねをあかせるもろくの聖教は、本願を信じ念仏を申さば仏になる、そのほかなにの学問かは往生の要なるべきや、まことにこのことわりにまよいはんべらん人は、いかにもく学問して本願のむねをしるべきなり。一文不通にして經釈のゆくちもしらざらんひとの称えやすからんための名号にておわしますゆえに易行という、学問をむねとするは聖道門なり、難行となづく、あやまて学問して名聞利養のおもいに往するひと順次の往生いかがあるらずらんという証文もそうろうぞかし」

そもそも真宗根本の教典、教行信証がその題目にいずれも、顯淨土真実教・行・信・証、等とありて、弥陀他力の真実を示さるより外はない。故に如何に聖人が一代藏經の中より縦横に引用したまいたるも、畢竟本願を信じ念仏を申さば仏になる、というより外はない。

「如来世に興出したまうゆえんは

唯弥陀の本願海を説かんとなり

五濁惡時の群生海、

まさに如来如実のみことを信すべし」

そもく一代仏教というてもこの外はない、いわんや他力真実を示されたる聖教は、本願を信じ念仏を申さば仏になるというより外にあるべき筈はない、全体現今宗学という一種の学問があるように考えられているのは、現にここに誡めらるる誤りをくりかえすものである。

言を換えて云わば御聖教は信仰の実験それ自身の外はないのである。皆信仰の結晶に外ならぬ。而して「本願を信じ念仏を申さば仏になる」の一語がまた教行信証をつくしている。本願は教である、信ずるは信である、念仏を申すは行である、仏になるのは証である、この外さらに学問などすこしも往生のために必要はない。若し学問が存在するものとせば、畢竟この本願を信じ念仏を申さば仏になるということわりを明かにするためである。

そもく弥陀の本願に称名を選択したまいたるわけは、若し多聞多見を以て往生の業としたら小聞小知の者は往生の望みを絶たん、それ故に如何なる愚痴無智の者も称え易からんために念仏の一法を誓い与えたまうたのである。故に一文不通にしてすこしも經釈のゆくちを知らぬものが、此の如き愚か者を助けんがために御成就下されし御本願か

と信じたてまつるが肝要である。

かつて私の従弟が私と同年齢にしてほとんど兄弟同様であったが、学問が不得意であった上に年齢に軍隊に入り、日清戦争にも従い、倭寇の間に日を送りました。凱旋の後如何にして門徒を教導すべきかということに非常に煩悶して寺へ帰って、謹みて仏前に勤行をし、何気なく御文を拝読したとき

「夫八万の法蔵を知ると雖、後世を知らざるひとを愚者とす、たとい一文不知の尼入道なりというとも後世を知るを智者とすといえり」

とあるに当りて、感涙にむせびて大歡喜し、これがために立派な信仰に入りました、その後、日露戦争に於いて大安心の上戦死して、却て今は淨土より私を憐みて眺めて下さることと信じます。

これが易行易修の念仏門たる所以であります、学問をむねとして自ら窮めんとするは聖道門、難行道のことである道綽禪師の申されしごとく

「我が末法時中に、億々の衆生、行を起し、道を修するも、いまだ一人として得る者なし」

と、全く聖道門を閉じ難行道をさしおきて

「唯淨土の一門ありて通入すべき路とす」

と、易行易修の念仏一門だけが信ぜられるのである。それ

に何ぞや学問を頼みにしているのは畢竟、名聞利養に住するので、前にも挙げた如く真に菩提を求める態度とは申されぬ。

そも／＼学問をむねとする学者風の律法に陥ると否とは根本入信の時、人生の名聞利養もすてはてて、唯如来の恵み一つに入るや否やに起因するのである。その実例として『口伝鈔』に出てある有名な逸話を示さねばならぬ、曰く

あるとき鸞聖人、黒谷の聖人の禪房へ御参りけるに、修行者、一人、御ともの下部に案内していわく、

「京中に八宗兼学の名誉まします、智慧第一の聖人の貴坊やしらせたまえる」

という。この様を御ともの下部御車のうちへもうす。鸞聖人のたまわく

「智慧第一の聖人の御房をたずねるは、もし源空聖人の御ことか。しからばわれこそ只今かの御坊へ参る身にてはんべれ、いかん」

修行者もうしていわく

「そのことにそうろう、源空聖人の御ことをたずねもうすなり」と、

鸞聖人のたまわく「さらば先達すべし、この車に乗らるべし」と。修行者おゝきに辞し申して、「そのおそれあ

導和尚の御弟子にこそあるなれ」と。その時修行者ふところよりつま硯をとりいだして、二字を書きて捧ぐ、鎮西の聖光房これなり。

この聖光ひじり鎮西にして思えらく、都に世もて智慧第一と称する聖人おわすなり、何事かはんべるべき。われすみやかに上洛してかの聖人と問答すべし。その時もしすぐれてわれにかさまば、われまさに弟子となるべし、また問答に勝たば、彼を弟子にすべしと、しかるにこの慢心を空聖人権者として御覧ぜられければ、今の如くに御問答あるけるにや。彼のひじりわが弟子とすべきこと橋をたてても及び難かりけりと、慢慥たちまちにくだければ、師資の礼をなして、たちどころに二字を捧げけり。

両三年の後、あるとき籠負かきおいて聖光房聖人の御前へ参りて、本国恋慕のころざしあるによりて、鎮西下向つかまつるべし、いとまたまわるべしと申す、即ち御前をまかりたちて出門す。聖人曰く、あたら修行者もとどりを切らで行くはとよ、と。その声はるかに耳にいりけるにや、たちかえりて申していわく。聖光は出家得度してとし久し、しかるにもとどりを切らぬよし仰せをこうむる、もとも不審、この仰せ耳にとまるによりてみちを行くあたわず、ことの次第をうけたまわりわきまえ

りかなうべからず」と云々、鸞聖人のたまわく「求法のためならばあながちに隔心あるべからず、釈門のむつび何か苦しかるべき、ただ乗らるべし」と。再三辞退もうすといえども、御ともの者に、修行者かくるところの籠負をかくべしと御下知ありて、御車にひきのせらる。

しかうしてかの御坊に御参ありて空聖人の御前にて、鸞聖人「鎮西の者と申して修行者一人、求法のためとて御坊をたずね申してはんべりつるを、路次よりあいともないて参りてそうろう、めさるべきをや」と云々。空聖人こたえ「招請あるべし」と仰せあり、よりて鸞聖人かの修行者を御引導ありて御前へめさる。

その時空聖人はたとかの修行者をにらみしますに、修行者また聖人をにらみかえし奉る。かくてやや久しく互に言説なし。しばらくして空聖人仰せられてのたまわく「御房はいずくの人ぞ、また何の用ありて来れるぞや」と。修行者申していわく、「われはこれ鎮西のものなり、求法のために華落にのほる、よて推参つかまつる者なり」と。その時聖人「求法にはいずれの法を求むるぞや」と修行者申していわく「念仏の法を求む」と。聖人のたまわく「念仏は唐土の念仏か、日本の念仏か」と。修行者しばらく停滞す、しかれどもきと案じて「唐土の念仏を求むるなり」と云々。聖人のたまわく「さては善

んがために帰まいれり、と云々。その時聖人のたまわく、法師には三つのもとりあり、いわゆる勝他・利養・名聞これなり。この三ヶ年のあいだ源空が述ぶるところの法門をしるしあつて隨身す、本国に下りて人を軽んじ従えんとす、これ勝他にあらずや。それにつけてもよき学生といわれんと念う、これ名聞の願うところなり。これによりて檀越をのぞむこと、所詮利養のためなり。この三つのもとりを剃りすてずば法師とはいいい難し、よてさもうしつるなり、と云々。

その時聖光房改悔のいろをあらわして、負の底よりおさむるところの抄物どもをとりいでてみな焼き捨てて、またいとまもうして出でぬ。しかれどもその余残ありけるにや、遂に仰せをさしおきて、口伝にそむきたる諸行往生の自義を骨張し、自障障他すること、祖師の遺訓を忘れ、諸天の冥慮をはばからざるにやとおほゆ、悲しむべしおそるべし。しかればかの聖光房は、最初に鸞聖人の御引導によりて、黒谷の門下にのぞめる人なり、末学これをしるべし。

如何にも見るが如く描かれてある。これ全く上に引用した涅槃經の文にある如く名聞・利養・勝他・論議のためにするものなれば即ち聞不具足の人である。信不具足の人で

ある。

全体今日の青年の道を求むる人が、理論や研究から進み修養のために、人格を高めるために信仰に入らんとする人が絶対の信仰に入り難いのがこれである。名聞や利養のためといえどもあまり輕蔑した様なれど、御恵み一つを頂かぬまでは真面目にすることまでが、畢竟名利を脱することが出来ぬのである。

しかるに若し人生問題より道を求むる時は、何事も皆駄目になりてお慈悲一つで救われるのである。全体聖光房は非常の学者である、又修道者である、そして如何にも道を求められたに違ひないけれども、道のために道を求められた故にいかにもかくなり安いのである。これを親鸞聖人に比較するに大いに趣が異なる。聖人の道を求められたのは十九歳以後人生に苦しみ悩みて、最後法然上人に遇い奉りて大慈悲を受けられたのである。それ故、学問も益に立たず、名聞も利養も生き残る余裕がなく、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしとよきひとの仰せをこうむりて信ずる外に別の子細なきなり、と、恵み一つに安心された。なぜならば、地獄は一定すみかぞかしと、学問も何も益に立たぬ非僧非俗の一介の愚禿親鸞として自覚されたのである『末灯鈔』に曰く、

「故法然聖人は浄土宗の人は愚者になりて往生すと候し

三たび律法主義に陥りて、誓願の不思議と名号の不思議を知り分け、聞きわけねばならぬといひ、経釈を読み学せねばならぬというような異議が起つたのである。

しかるになお注意すべきは、歎異抄著作時代ばかりでない、後年宗学なる一部門を形作りて、信仰門とほとんど分かれて成立し得る如く考えらるるは、これ四たび律法主義に陥つたものと言わねばならぬ。真宗の聖教は、生ける信仰の他に何物もない筈である、そも／＼宗学なるものの真精神も信仰の他にあるべきではない。又初めは信仰で実験的道筋を味うためである。しかるに何時の間にか学問化し律法化し、逆に信仰の生命が蟬脱して一種の学問の如く考えらるる様になって。名聞利養の道具となるのである。

しかしなお注意すべきことは、昔の宗学ばかりではない現時青年の信仰問題でも左様である。兎角の理屈や学問が信仰のためにはならぬ、唯お恵み一つを心に頂くばかりである。しかるに真実恵みを頂かずに徒らに信仰を言葉で繰り返すときには学問や理屈が難りてくる。極端に言えれば真にお慈悲に気付いた者でもお慈悲を忘れて、自分が攫んだ氣になつて研究に陥るときは冷かになつてしまい、お慈悲を解剖したり、御廻向のお恵みを名利の道具に用いる様になる、真に懺悔すべきことである、五たびでも六たびでも同一の律法主義が繰返さるるものである。さりながら真実

ことをたしかにうけたまわりしうえに、ものも覚えぬあさましき人々のまいりたるを御覽じては往生必定すべしとて笑ませたまひしを見まいらせそうらいき。文沙汰してさか／＼しき人のまいりたるをば、往生いかあらんずらんとたしかにうけたまわりき、いまにいたるまでおもういあわせられ候なり」

証文とは、この法然上人の仰せ、これを伝えたまいし聖人の御話をいうなるべし。実に信仰問題は千古万古同一の軌道を繰返すものである。

そも／＼法然上人が、聖道難行をなげすめて、智恵第一の上人が、十惡の法然坊、愚痴の法然房として、専修念仏をひろめたまいたのである。しかるにはやその弟子中にて現にこの御言を耳にし、その態度をまのあたり拝しながら残念なことには真の御恵みを頂かぬために、修養して上人の態度を擬するまでで、専修念仏の味がわからぬ故に、念仏を称えつつも、出来る限り学問して往生の要をきわめ、出来る限り善を行ずるに如くはないと考えるもの故、知らず識らず再び律法主義に陥り、諸行往生を許し、又学問する程往生の路を明らむるようになつたのである。これ鎮西、西山の諸流である。

しかるに、その専修念仏の骨目を伝えたまいて、信するほかに別の子細なきなりと告白したまいし聖人の滅後、亦

お慈悲に気付かせて頂けば直にお慈悲に引き戻さるるのである。聖人が名利の大山に迷惑しと仰せられ、小慈小悲もなけれども、名利に人師をこのむなり、と仰せられたが、このお慈悲の下に懺悔し、立戻る有様をお示し下されたのである。聖教を拝読し、又伝道に従事するものは此処に気付かせて貰わねばならぬ

未完

あさがお 山村暮鳥

あさがおは

口を漱いでみる花だ

まずしく

ひもじく

おなじく

一りんの

朝顔に

かすかな呼吸のような風……

しみじみと

静かに生きようとおもう

近角常音先生聞書

花 田 正 夫

『弟を子供の時より育てたけれども、彼に別段不足はなけれども、彼奴が、いつまでも〱我慢が止まぬのには、あれは困ったものだ、可哀相なものだと、兄さんが、愚痴をこぼしていましたよ』と、この姉（常観先生夫人）の一言には、初めてお慈悲の片鱗を知らせて頂きました。

〇『一旦わかったと思うては、また間違ひ〱、それだから、何処までもおあきれないお慈悲でないか』との亡兄（常観先生）の一言は、現に間違ひている私の心には、鉄砲弾の如く命中して、真にお呆れ下さらぬお方は、人生唯この御一人なることを知らせて貰いました。

以上、 常 音。

この御言葉は昭和二十六年六月一日、求道学舎五十回創立記念日の夜、先生が記念として佐藤強三郎氏に書いて渡されたものであります。

ですのや。

その無茶苦茶になる奴を可哀相に思召し下され、お見捨てないお慈悲である。

〇信仰に入ればニコニコとうるわしい日が送れると思つて

いるが、そうでない。
信仰に入つても、入らなくても凡夫だ。それを目あてのお慈悲です。

〇自分の心に信仰をつくらうと苦心ばかりしている、そのような奴を可哀相と思つて下さる。

〇片輪の性分の私をお見捨てないのである。三尺の蛇は何処までいつても三尺の蛇である。その三尺の蛇が、長虫、長虫というて世間からきらわれるから、すこしは短うならぬものかと色々とやつて見ても、どうにもならない。その一分一厘どうにもなれぬ長虫の私ゆえお見捨てない。

〇まちがわぬようになれるのではない。まちがいだらけの私をどこどこまでもお見捨てないのが仏の大悲である。

以下は、戦時中度々名古屋に先生をお迎え申しまして、御講話を頂きました時、お法話の断片を記録しておりましたもので、すでに一度慈光誌に掲げましたが、先生の御忌月にあたり、あらためてかかげさせて頂いて、先生のお導きを蒙ります。聚墨生

〇どこどこでもの御慈悲ということは、私がどこどこでもどうにもならぬということだ。

〇いくらわからなくても、分るまでついてはなれぬ方があって下されば、私がわかる必要はないではないか。

〇私は私が不真面目であればあるだけ、真面目になって下さるのだ。

〇病気がなおつてみたところで、そんなことは小さなことと言ふような殊勝な気になれる人間じゃない。病気になるばなおりたいく〱無茶苦茶になるのです。私は無茶苦茶

あゝならねば、こうならねばということ、仏様の方に付けてはならぬ、それは自分が勝手に思うことです。

〇誰にも見捨てられる人間だからこそ仏様がお見捨てない捨てないのが仏様です。

捨てない！それだけですのや。

〇その仏様に骨を拾つて頂くのです。

〇病氣のお前が愚痴がやまぬのはあたりまえだ。やまぬものならやめるナ。仏はそれを知り抜いて見すてぬ。

〇お前の思つている仏様は仏智不思議ではない。

よくなれぬということをお存じの仏様が、よくならねばならぬとはいわれぬ。よくなれぬのが可哀相だと思つて下さる。

〇それは道理にあわぬ。そこが仏智不思議だ。

〇出来そこないが、話を聞いてわかったら、出来そこないでないようになるのではない。

話を聞いて、出来そこないがなおるようなら、今まで出来そこないではおらぬ。

〇どうにもならぬ出来そこないのものを、出来そこないだ

からどこ／＼までも可哀相に思ってお見捨てないのだ。

○ お慈悲では氣にいらぬ。立派な信心をこしらえあげたいそれが我慢です。

その我慢のやまぬ奴なればこそ、どこ／＼までもお相手下さるのがお慈悲だ。

○ 見込みのない奴だからお慈悲だけが、どこ／＼までもおあきれない。

○ 唯も相手になつてくれぬ氣違いだから、その氣違ひしよりの者をそこを可哀相に思うて下さる。

○ 私は兄貴が信心いただけ／＼と私に言うてるように聞かえたのです。ところがそうではなかった、信じられぬ者を、信心頂けた者と同様に思うぞ、すこしもへたでぬぞ、というお慈悲でありましたのや。

○ どうして見たところで、泣いたり、おこったり、笑ったりより他出来やせぬ。

○ 私如き極重悪人が、どこ／＼までもお呆れなき不思議の

自然法爾に就いて

……宿命論的諦めを排す……

ルソーが「自然に還れ」と叫んだ。いう心は、印刷術が人間を混沌に陥れ、哲学は国民の道德的健全を頽廢させ教育は人を善良にしない、唯伶俐にする、而も悪い方面に。文化が進んで人々は益々正直でなくなる計りである。だから理性よりも本能感情へ、複雑よりも単純へ、作為よりも自然に還れ、という熱心にして誠実なる主張なのである。

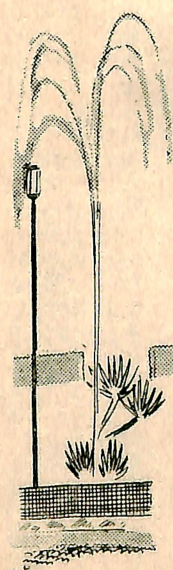
廿世紀は神経衰弱の世紀であると言わるる如く、現代人の多くは神経衰弱にかかっている。文化は事物をして益々微細精緻ならしめ、人々は末梢神経を愈々尖鋭ならしめる結果である。これが対症療法の有効なるものとして「自然に還れ」も確かにその一つたるを失わない。少くとも形式的外部的な、上っ走りの文化を謳歌しているものに對しては痛快なる頂門の一針である事は確實である。然し十分に精査すれば「自然に還れ」は一時これによって病状の昂進を抑え得たとしても、到底根本的の救済治療には役立たない、何故かなれば、人は本来の欲望として自然、作

お慈悲に真から頭が下ったのだから世界中の人も必ず救済されるにきまつて居ると信じて居る。この広大の御慈悲を信ずる上からは、自然の御はからいにまかせよう、何の心配もいらぬことだ。

○ 私は兄貴（常観先生）が、悲しい時には悲しみ、嬉しい時にはよろこび、ことに思うことが実現せぬ時には困って弱って、私共と同じ凡夫の姿のままで広大な御慈悲一つを信じてよきこともあしきことも業報にまかせて唯念仏して安心していた。それこそ本当に有難いことと思うている。

○ このころこれを阿闍世とのたまいて見捨てじというみ慈悲なりしか

よしあしはひとにはあらん大悪の阿闍世われにはよしあしはなし



波岡茂輝

為の両方面を心の中に抱いている。だから自然に偏すれば作為は寂しく、作為に偏すれば自然は悲しい、一方に偏する事は許されない。そんな議論はとにかくとして自然法爾は決して一方に偏する「自然に還れ」とは同一視すべきではない事だけは明らかにしておかねばならぬ。

次に世には運命論又は宿命論という主張がある、人間の意欲行動は総て一種の超人間力、既ち運命、又は宿命に決定され、又はされている。運命は絶対的偉力で、一切の生起はこれによって必然的に生じ、人間の力を以てしては何としても変更することが出来ないと観するのである。従つて此の論者は人間の意志の自由を認めないのである。折角山に登って四方を展望しようという考で、せつせと歩いて来たが裾野か中腹かで草臥れ出した。十歩に一休み、五歩に一憩い、もう歩めない、もうこれまでだ、これが自分の力の全部だ。とその場にどっかりと腰をおろして、登山も展望も捨てて顧みない。そして思うに、これ宿命だ、自然

に勝つことが出来ぬ、と諦めてしまふ。何のためにこゝまでやって来たかも知れなくなつて唯寂しく諦めてしまふ。道德の遂行も、理想の実現も一に宿命に服従して、成り行きに任せる。成る通りにしかならんのだ、と諦めをもつて寂しい悲しい終局とするのである。自然法爾は仏陀の慈悲、成仏の理想を決して離れるものではない。宿命觀を以て自然法爾と混同するは大なる誤である。

なおこういうこともある。「柳は緑、花は紅」とか「眼は横にして鼻は直」というような仏語を淺薄に解して、吾々の眼に見え、耳に聞こえ、心に感ずるものを以て直ちに事物の真相だとし、これを自然そのものと断じて、先驗的の真面目を把握しようとしぬ。譬えば空の樽をゆさぶつて音がしないのと、内容の充実にしては樽をゆさぶつて音のないのを以て、直ちに兩者同一と早合点したとしたならば誰がその愚を笑わぬであらう、本能意欲の自然のままの行動や、多少の辛苦のために、理想道德律を中途にして放擲する事を、柳緑花紅とし、眼横鼻直とし、ある通りにあるのだと一角の悟を開いた積りで納つてゐる。こうしたことは決して悟道でも徹底でもない。これと自然法爾とを混同したなら驚くべき外道である。

斯うした邪道に陥つたのは他人ではない、私自身であつた。ここに私の恥すべき過去を告白する。私は青年の頃、

きに任せる、有る通りにあるのだ、成る通りにしか成らないのだという自然主義的宿命のままの諦めに陥つてゐるにすぎない事に気付いて、再び驚いた。私は仏陀の誓願、仏陀の慈悲、仏陀の廻向を忘れていたのであつた。私はそれを知ると同時に、誓願の不思議に感謝し、罪惡深重の凡夫、將來も何を仕出かすか知れない、人心惟危く、道心惟微なる凡夫のままのお任せの生活に安心し歡喜するところが出来たのである。思ひは永い間の有為轉變極なりなき生活であつた。こうして迷いに迷うて来た跡を見ると「自然に還れ」とか「宿命の服従」とかいふ「いい加減の悟り、いい加減の信仰」は誠に恐るべき陷阱にすぎなかつた。

然らば自然法爾とは如何、前号で述べただけでは物足りない気がするから、もう一度述べさせてもらふ。自然ということは、吾々の五官、又は心意の經驗の対象という意味の自然ではない。人為の対照する時、空、因果の法則による森羅万象を指す自然の意味の自然でもない。自然法爾を輕卒に考へると此等の自然と混同して、運命に素直に従ふこと、本能意欲のままに生きることの様に即断し易いが、決してそうではない。

自然法爾は、仏陀の御計らいなるが故に自然と云い、仏陀の御誓なるが故にしからしむるを法爾というのである。もとよりわがはからい、わが力のまじわらざるをいうので

自分の行動や心を省みて、こんな事ではいけない、と發憤して、禪の修行を始めた。思索工夫の結果、一大光明に接した。そして聖凡不二の信念を把握した。勿論その後の私の生活はこの信念を基調として行動された。そして得々として、嬉々として、心の欲するままに行動して、青春の幾年を經過した。或日ふと不安もなく、畏るる処もなく行動して来た過去の生活を顧みた時、愕然として驚いた。恰も放從主義者であるかの如く、あらゆる行動は悉く罪惡でしかなかつた事を發見したのである。忽ちにして聖凡不二の信念ががら／＼と崩れた。その後、仏陀の救済をねがって本願の教を聴いた、三年にしてなお救済を感じなかつた。再び禪にさまよい入った。意志の薄弱なる身には徹底的の修行が出来なかつた。だんだんと自分の力の弱小にして、とても理想の実現など覺束なきを感ずるに至つた。こうして動揺と不安と焦燥と罪惡の繰り返しの日を続けながら壯年に及んだ。私は再び歎異鈔を拝読し始めた。そしてある日ふと、「このままのお救い」を感じた。自分の役立たざるを感じて、あれほど熱望し來つた理想も割愛しなければならなかつた。この時、私は青年の時、聖凡不二の信念を得たときよりも更に歡喜した。何日も何日も平和な心、明朗な心、爽快な心が続いた。そうしてゐる間に、まもなく、自分の安心は理想の無視、向上よりの解放で、成り行

ある。信仰の生活とは自然法爾をさして云うので、決して理想の放棄、道德の逃避、責任の妥協、諦めの偷安をさしているのではない。

私という人間は、罪惡深重にして、煩惱の常に燃えさかっている凡夫である。心はいつも動揺して暫くも安靜を得ない凡人である。善と思つたことも遂行することが出来ず、悪いと思つた事を避け斥け得ない凡人である。その善いと思つて行つた事もよくよく吟味すれば、疚しいものがある。その中に潜んでゐるし、又その善いと思つたことも、実はすこしもあてにならないものであつたりする様な事の多い愚者である。才能も何一つ他に優れてゐるという自信もない。それなら一心に努力して向上發展のために邁進するかどうかというにそうではない。唯安閑としてゐるような愚者である。仏陀はこの自分ではどうにもする事の出来ない凡愚を予て知ろし召して、南無阿彌陀仏とたのませて、極樂に迎えんという御計らいである。唯私どもはこのままでお任せすればよいのである。お任せした以上、仏とは如何、念仏とは如何、地獄極樂とは如何、往生とは如何などと思ひ煩う必要が何処にあらう。そうした論議は自然法爾を破るものである。自然法爾は無義為義である。不可思議である。神秘である、超人間力である。それは自然法爾である。

異常気象と友人の病没に思う

福田 鉄 雄

この春以来「異常気象」とか「冷害」という語を、新聞ラジオ、テレビ等の報導機関から見きしめない日とてはな
いような気が致します。

ことしの天候の異常は全国的でありました。特に北陸、北関東、東北、北海道の豪雨は数十年来といわれ、その上春になつても寒波がしばしば襲来し、そのため雪消がおくれ、従つて田植も一ヶ月おくれた地方は岩手県にもありました。

今年の気象状況は百八十一年前の天明四年の大飢饉の年に酷似しているから、この調子では夏も寒く冷害はまぬかれないであろうと農林省や気象庁からさかんに警告され、東北、北海道では農家ばかりでなく、一般人も少なからず不安の念を抱きました。ところが五月下旬から六月と順調な天候と高気温に恵まれ、農作物の生育状態が大体平年並においていたとして、世間もやや落ちつきをとりもととしたよう
にみえました。しかしそれも束の間、又々七月に入つて

えます。ところが病人は之と反対で抵抗力弱く、気象に著しい異変がおきると非常に悪い影響をうけることは、充分予想されるのであります。実際ことしの異常気象でこのことが立証されると思ひます。と申しますのは、私が平素ご厚誼を賜つていらっしゃる方々のうち、五人の友人親戚の人が、今年一月から四月までの間に亡くなりました。私はこの悲しい出来事は今年の異常気象によるものと結論してあります。もっともこのうち一人は高令でしかも病氣は痛でありました。他の人々は冬から春にかけ繰り返し襲来した寒波に悩まされつゝ不幸な転帰をとつたといわざるをえません。

私の過去十八年という長い病床生活の間に、僅か数ヶ月という短時日のうちにかくも多くの訃報に接したことはありません。私よりずっと後に病床生活に入った人々に先立たれ非常な衝撃をうけ、ひとり取り残された淋しさ、何物をもつても充たされない空虚さに堪えられませんでした。

私はこの人々から受けたご恩を書き綴つたなら、この悲しいやるせない気持ちがいくらかでも慰められるかと思ひました。ところがいざペンをとつて見ますと、私自身辛うじて異常気象を生き抜いた有様で、ここ数ヶ月以来衰弱甚だしく、その上頭も混乱し筆は少しもすすみませんでしたそれに書き出しますとあまりに私事にわたり、およみ下さ

異常低温に襲われ、農家の表情は又暗くなりました。

他方中部地方、関西、九州方面では局所的集中豪雨に見舞われ被害甚大とききます。やはり今年の気象はどこまでも異常といわねばならないようです。何分にもおてんとささま相手でありまして、それに現在のところ気象の長期予報の適中率は高いたともおもわれません。先の見通しはなか／＼むつかしいです。農家としては施肥や農薬の使用等農作物の管理に人事を尽して天命を待つほかに、取越し苦労しても詮ないことでありましょう。病人にとつて酷暑はまことに凌ぎ難いのでありますが、国の福祉にはかえられませんか。それに夏の暑いのは当然のこと、どうか適度の高気温と充分な日照りに恵まれて、豊かなみのりの秋を迎えたいものであります。

ところで人類は地球の表面に生活している以上、気象に支配されることは申すまでもありません。健康体なら気象の変化の刺激に適応しかえつて健康を増進することもあり

る方々には何の益も興味もお感じにならないと思ひ、やめようかと躊躇しておりました。

ところが六月二十八日に「慈光誌」六月号が配達され、その「あとがき」に

「本年は季候が不順で、老人や病弱の人々の多く死去されましたことは珍らしい数と聞きます。又六十年來の凶作の天候と一致して居るとか氣象觀測所の発表がありました。いたずらにおそれず、また油断せず、念仏裡に過させて頂きましょう」

とありました。これを読みまして私の遭遇しました不幸の数々は、他にも多数例のあることで偶然でなく、根拠のあることを確信させて頂きました。そして故人を偲びながら私の経験を記録にとめようと思ひなしておいてこの冗文を執筆することに致しました。さて書き出してみますと少しもまとまらず、それに内容はどうしても私事ばかりになリなんと恐縮の至りに存じます。

先ず一月下旬に五十年來の友人が東京で亡くなりました私は大正四年仙台の二高に入學しました際、白井成允先生の御令弟、武さん（十数年前物故）のご紹介で、道交会自治寮という寄宿舎に入りました。この一月亡くなった友人は、私の一年先輩の寮生で、名を斎藤義八さんといひます。

余談になりますが道交会自治寮につき簡単に紹介致します。設立は私が入舎の余程以前のことでありまして、記憶力の弱い私ですらなるべく確からしい点だけ申し上げます、道交寮は二高校長三好愛吉先生が創立されたと承っております。設立の趣旨は二高在学中に仏教の信念を身につけることを希望する青年を入舎させるというのであります。場所は仙台市東三番町、東本願寺東北別院の境内で、建物は仏間、食堂、娯楽室、静養室、寮生の居室等合計二十数室、収容人員三十余名、一室二名という規模でありました。

毎朝、食前一同仏間に集合して約十分間勤行します。仏法の方は禪を修行する至道会と、お念仏のご法話を聴聞する同朋会に分かれ、寮生はその欲する方へ入会するのであります。禪の方は松島瑞巖寺の松原磐竜老師に参禅し、お念仏の方は毎学期一度近角常備先生を東京よりお迎えしてご法話を聴聞することとなっております。この仙台道交寮は残念なことに戦災で焼失し、その上戦後の学制改革のため創立数十年の歴史を閉じました。その間二高の先生方は寮生の指導と寮の維持経営のため格別のお世話下さったのであります。設立者であられた三好愛吉校長先生、阿刀田令造校長先生、福島政雄先生、白井成允先生、外山岑作先生等のお骨折は並々ならぬものがありました。寮生から

は多数の人材を輩出し、今現に学問、宗教、教育、政治、実業其他各界に於いて旺んに活躍しておられます。なお前述の通り仙台道交寮は解散になりましたが、今年東京道交会自治寮は仙台道交寮関係者及び篤志家のご寄附により新たに建設されたことを申添えます。

話をものともどしまして、私は斉藤さんと二年間道交寮に於いて起居を共にしました。一室に同居する二人の組合わせは、毎学期初め抽選で相手を定める規定でしたが、斉藤さんと二度同室する機会に恵まれました。二年生の時のことでありますが、私は一学期の終りから二学期の半頃迄、父の胃癌の看病のため学校を休みました。その間に学科、特に数学がすっかりおくれ何んとも当惑致したのであります。これを斉藤さんは気の毒におもわれ、微分学の手ほどきをして下さいました。微分学入門には考え方で頭のかえりが是非とも必要ですが、斉藤さんは頭の悪い私に愛想をつかさすことなく、懇切丁寧に教えて下さいまして、おかげで三年生に進級出来ました。全く忘れることの出来ぬ御恩を蒙りました。

斉藤さんは東京大学工業部電気科卒業後、更に法学部に学び卒業後鉄道省に就職し、地方及び省内の局長のポストに歴任し退官後は芝浦製作所の社長にられました。

斉藤さんは禪の修業をなさいましたが、もともと資性温

厚篤実、頗る円満で友情に厚く、官界にあつてはあまりに好人物すぎるといわれる程人望あり誰からも敬愛されましかた。私が東北の寒冷の地で病んでいるときけば蓄熱電気行火を、静岡に出張したとてはお茶を送って下さいました。柔道二段、堂々たる偉丈夫でありましたが数年前より気管支拡張症と心臓病で入院、自宅療養を繰り返しておられたように承っております。病気の小康を得た時は、お互に一日も長生きしようとお互のし手紙を交換致しました。昨年あたり一時快方に向つたと仄聞致したのに、今年に入り病革まりついに不帰の客となられました。再起の叶わなかったのは異常気象禍によるものと残念でなりません。

次に二月上旬に、昨年来癌で療養中の親戚の八十才になる老医が宮城県で亡くなりました。この方は若い時から非常に健康で病氣したことを聞いたことがなかったのに、数年前から痛にかかっていたものでしょうか、昨年になって症状があらわれたので、直に入院加療したら結果がよく一時快方に向いましたが、二月病革まり遂に再び立てなかったのであります。この方の病没は、高令に加うるに癌でありましたから寿命というべきでしょう。

私が忘れることの出来ないのは、私が昭和二十三年肺結核が再発し突然重態におちいった時、この方は宮城県から

はるばるかけつけて診察され、療養上の心得を事細かに指示して下さいました。爾来十数年間幾度となく見舞に来盛されたご親切は胆に銘じております。この老医は元宮城県医師会副会長に選ばれたことのある楠信四郎という人であります。

二月中旬には、昭和十四年岩手医専を卒業した松谷忠彦医博が山形市で五十才を一期として四人の令嬢を遺して永眠されたとの悲報をご夫人から受け取りました。私は専門も違いますが師弟という関係ではありませんが、格別親密な間柄でありました。

又余談になりますが、昭和十一、二年頃当時、岩手医専で教授三氏と私が発起人となり、学生十四、五名と婦敬会という仏教の会をつくり、毎月一回、発起人の自宅を順番に会場として高德の師を招いて法話を聴聞したり、歎異鈔の輪読を致しました。松谷君は幹事役をひきうけ会合の準備などのためよく働いてくれました。

松谷君は卒業後直に軍医となり、戦時中はビルマ戦線に従軍して病を得、終戦前に帰還しました。病氣回復後は岩手県内数ヶ所の診療所の医師として診療に従事し、至るところで誠実有能な人柄技術は高く評価され、患者の信頼することぶる篤かったのであります。この当時私共夫婦はまことに似合わしい才媛を奥さんにお世話致しました。爾来いよ

いよ緊密におつきあい致し、わけでも私療養中は治療のため来診下さる許りでなく、なにかと營養品の補給にまで心をくばってくれました。痒い所に手がどくと申す通り、病人の気持ちをよく察して言葉のはしばしにも氣をつかって勇気づけてくれました。その誠実さには文句なく頭が下りました。

十年許り以前、郷里山形市に帰り、市立病院内科に勤務することになりましたが、数年後松谷君も肺結核が再発し療養生活に入ったのであります。療養に於いては私は先輩となりましたから、釈迦に説法というめぐり合わせでありましたが、私も一生懸命療養者の心得を手紙をもって経験語りしました。療養に専念の甲斐あって健康を恢復し、月に数回信仰問題や身辺雑事を報ずる手紙を頂きました。そして互に一日も早く全快を祈念しあったのであります。山形県は果物の産地でありまして、いつも四季折々の名物を欠がさず贈与にあずかりました。昨年の夏は近くのバラ園を見物され、奥さん令嬢方とのカラー写真を送って来ましたので、この分なら遠からず再び診療に従事出来ることと推察しておりました。それなのに今年になって病勢急激に悪化して急逝したことは何としても哀惜のいたりにたえません。これは實際異常氣象の所為と断定せざるを得ません。続いて三月下旬、盛岡市在住の友人の死にあいました。

あれば拙宅に来訪して私を慰めてくれました。病人の私と老妻では、如何んとも致方ない難儀な家事仕事を片端しから適当に処理してくれました。しかも一切無報酬、何か心許りの謝礼を出す、非常に機嫌を悪くし散々におこられました。この誠実さは倉さんの生まれつきで工場勤務中も若い工員、或は困っている人を見れば損得を度外視し問題解決のため奔走し労をいとみませんでした。倉さんは話上手で特にスポーツ話は得意でした。話題頗る豊富でしたが中でも倉さん母子がその徳行を慕い帰依篤かった盛岡市円光寺（浄土宗）住職、武田真隆師の逸話は興味深いものがありました。

又々余談になりますが、真隆さんの逸話を二、三ご紹介致します。真隆さんは酒が大好きで、若い時飲み過ぎなどで汽車の乗越しの失敗をしたりして心機一転、以来法事や年忌等檀家など外では一切飲まず、世間では酒きらいでとおっておりました。その代り寺に帰れば冷酒を茶碗で一升位忽ち平らげてすぐに床をのべて寝たそうです。午前二時頃目をさますと机前に端坐して「なむあみだぶつ」とお念仏を称えながら白紙に何枚となくお名号を認めていたと云います。そして寒中の夜中、近くを流れている北上川にかかっている明治橋上より流したとのことです。

最も奇特であったことは私財をもって多数の孤児を養育

この方は前岩手医大耳鼻咽喉科教授、金野敏氏でありまして卅五年来の親友でありました。金野教授は十数年前心臓病で長いこと入院治療して快癒し、再び教壇に立ちました。が、間もなく再発し、爾来入院、自宅療養を繰返して治療に励まれました結果漸次健康を取りもどし、数年来しばしば拙宅に来訪されるようになりました。昨年夏は友人と温泉への遊行をとにもされる程元氣になりました。ところが今春の変動著しい異常氣象の悪影響を受け病状急変して、ついに三月二十九日六十二才の生涯を閉じられました。

金野教授は耳鼻咽喉科学界に貴重な業績を残し斯界の權威として広く認められ、特にその手術の手際の見事さは入神の技といわれた程であります。私の肺結核が益々悪化して喉頭をおかしかけた時に特別の療法を施し、おかげでその進行をくいとめ今日まで生きながらえたのであります。

最後に私は四月廿九日接しました悲報につき述べてさして頂きたいと思ひます。それは私が平素「倉さん」という愛称をもって呼び親しんでいた友人が、突如として六十三才の一生を終ったのであります。倉さんは私の亡兄がかって経営していた鉄工場の工員として四十年以上も勤務し、停年すぎても鉄骨の組立、大規模機械の運搬据付等に関する特技をかわれ引き続き勤務し数年前退職しました。退職後も方々の事業所よりの依頼で仕事もありましたが、暇さえ

し立派な社会人として世に送り出したことであります。このことは不思議に盛岡人もあまり知りません。倉さんの母堂は寺の台所のお手伝いとして多年出入したので、真隆さんの日常をよく知っておりました。真隆さんは、終戦後間もなく高令で亡くなりました。

話を倉さんのことに戻しまして、彼は拙宅の前を通る時は、必ず門を入り私の病室の窓をあけ「今日気分いかがですか」と見舞の言葉をかけながら、笑顔で私の顔を眺めながら「ア元氣ですナ」と云うてそのまま帰ります。倉さんは仕事中他の工員の不注意で時々怪我をしましたが平生は健康でした。ところが昨年暮れ頃から下痢と下腹部の疼痛あり、以前勤務した工場と契約のある病院に通って居りました。

この四月廿日に拙宅にまいり「今日病院で直腸に腫物が出来てから入院手術せよ」と云われたと、如何にも真剣な面持です。私は之は容易ならぬことと思ひましたので、尚他の病院でも診断して貰うように話し、私の最も信頼する外科医を紹介しました。越えて廿二日来訪し「御紹介の医師は一番たよりになると思ひ、家族とも相談の結果入院手術することにしました」といい、更につけ加え「入院準備は終わったが兎に角自分の命は今度限りである氣がしてならない、これでお別れです」と繰り返しますので、私は

「そんなことはない、病氣は一切医師におまかせしなさい」と元気づけました。倉さん辞去後医師に電話で容態をききましたら「直腸癌が大きく腫診され転移もあるが人工肛門をつくれれば、一時楽になると思う、廿八日手術の予定」とのことでありました。

かくして手術の翌廿九日突如死去の悲報に接しました。

私は夢想だもしなかったこの結果にただ呆然とし、友人の寿命を縮めたのは私の軽率な判断の結果でもあるという自責の念に堪えず、ただ／＼本人の霊と遺族の方々に心から深く謝罪し、お悔みとおわびの手紙を書きました。歎異抄の「害せじとおもうとも百人千人を殺すこともあるべし云々」の御語をこの時程身にしてみても強く感じたことはありません。依頼した医師からは癌は完全に切除したが、翌日になり急性肺炎を併発し突然重態におちいり、出来るだけの手を尽したのに、何分にも僅か二時間の経過で不幸な結果となり何んとも申訳なかったとの電話がありました。

大手術は患者にとって致命的重大な負担であることは申すまでもありません。ただ非常に運の悪いことには、廿八九日に亘り春には珍しい寒波が日本全土に襲来したのであります。そのため急性肺炎を誘発したに違いないと思われまします。この日盛岡の気温〇度、東京は六度で冷雨、日光東照宮は時ならぬ雪降り、関西方面も異常低温でありまし

又たとい報酬を要求されたとして私は何をお返し出来ましよう。五分五分の世の中とは申ししましても、私に關する限りはご恩を蒙るばかりの一方交通であり、私に対しご恩の十割給与でありました。本当に勿体ない話であります。この方々は世間のどなたとも真実心をもっておつきあいなされたのでありましよう。しかし私に賜ったご愛顧は私から申しますと、私にだけ賜ったものと頂かざるを得ません。十方の衆生救済の阿弥陀仏の本願を親鸞聖人は「弥陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり、云々」とご述懐遊ばしたものであります。人間の關係におきましても、ひと様から賜ったご好意の真髓とも申すべきそのおまことの心を頂けば、如来様から賜るおまことと同じく有難く味わして頂けます。それは前述の五人の皆様には何物を以つてもその値を評價出来ぬ程貴重な宝所謂無価の賜物を下さったからであります。

この度故人になられた方々は、夫々の方面に於いて活躍され、社会に大きく貢献されました。交友の範圍もまた広がったのであります。しかし「去るものは日々に疎し」と申します。浜辺にのこした足跡が波にさらわれ消え行く如く人間の生涯も世間から忘れられるのも自然でございましょう。私は社会の片隅で、本当にあるかなしかのか弱い生命の火をとぼしているものであります。今は亡き友人各位

た。私がかげがえのない友人を失った不幸も全く異常氣象のなせるわざでありました。實際四月廿九日から五月上旬にかけ、盛岡市内の病院の手術患者は多数肺炎で死亡致しました。

以上慈光誌としては場ちがいと思われ、しかも無味乾燥な稚拙の文を綴りまして心から恐縮に存じます。私はこの世に生れましてから、父母を始め無数の人々、恒河沙という語で表現される生きとし生けるもの、及び生なき日光、空氣、水等の無生物のおかげで今日まで生を保ってまいりました。その広大なご恩は何時も深い感謝の念を捧げております。又現に諸先生、先輩、友人、親戚等の筆舌に尽せぬ恩顧、家中のものの心のこもった看病は衷心より感銘して居るものであります。

しかし今年、過去数十年來の友人親戚の相次ぐ逝去に遭い、同じ病人としての悩みの心の通いあいが思い出されると同時に、前述の五人の方々のご生前中に賜った御厚誼に対する感謝の念が油然と湧いて参ります。特に私が病床生活に入ってから頂いたご好意は、純粋な皆様のおまことのご精神から出たことに絶対間違いないのであります。と申しますのは皆様はこの病人の私に何物を酬として求めておられたでしょう。一切報いを求めておられませんでした。

とはそれこそ幽明境を異にし、言葉もかわされず、手紙の往復も出来ません。しかし私の心の中には、蒙った御恩の姿でご在世中と少しも変らず生きておられます。

思いがここに至りますと、私が先般拝読致しました金子大栄先生の御著「教行信証総説」のご文章の一部を想起いたします。すでにお読みの方もございましょうが、抜き書きさして頂きます。

『至心、信樂・欲生ということを、仏の心としていうならば、至心は真実心である。信樂とは大悲の心である。欲生とは廻向の心である。如来の真実心が至心であり、如来の大悲心が信樂であり、如来の廻向心が欲生である。これで三心の大意がわかるわけであります。真実の心のことは、昨日いろ／＼申したのであります。今日は、信樂が如来の大悲心であるということ「信卷」を拝読しながら明らかにしてみたいと思っております。

「つぎに信樂というは、すなはちこれ如来の満足大悲、円融無碍の信心海なり。この故に疑蓋間雜あることなしかるが故に信樂となづく。すなはち利他廻向の至心をもて信樂の体とす」

これだけの言葉をもって、信樂は如来の大悲心であるということをいってあるのであります。この言葉の上に感じられますことは、信樂というものは、仏の大悲が満たされ

て、しかも、円融無碍であるということである。円融無碍
ということは、仏の大悲心が、われら凡夫の心の上に顕
れ、そして顕れた仏の心と、顕した仏の心が、一にして二
であり、二にして一であるという境地であります。

信心の境地を、こういうふうに云いあらわしてあります
のは、広くいえば、真宗だけではない。たとえば道元禪師
も「月天にあり、水地にあり」というておられる。月は天
上に輝いておるし、水は地にある。その天上の光が水に映
る。月の光は水に映るのであるが、その月の光が水を破る
わけではない。また、水が天上の月を濡らすわけではない
という。悟りとか信心とかいうものは、そういうものであ
りまして、隅なく照らしている天上の月が、濁っている池
の上にも映る。どんな小さい葉末の露の上にも天上の月は
宿る。月が大地へ降りてくるわけではなく、露が天上に行
くわけでもない。しかるに、光いすこにありやと云えば、
われわれは天上を仰いで見なくてはならぬというわけでも
ない。光いずれにありやといえ、映っておるところの池
の中の月影——そこに光がある。葉末の露を眺めて、そこ
に光ありということが出来る。これが円融無碍というもの
であります」

私はこのご文章のお心を有難く頂いて居ります。どぶど
ろの如き私にも、僅かに心の水が上を覆うておりまして、

も減退して参りましたから十数年来の主治医のI線検査
をお願いしたところ痛と診断されました。丁度原稿執筆
中でございましたので益々脱稿がおくれました。

これから一日も長く生きようと存じまして癌患者の寿命
を延ばすべき日常生活方法を各地の友人医師にききあわ
せて居ります。御承知の通り癌の療法は現代まだござい
ません、手術は不可能な身体と病状ですので、所謂保存
療法をやる外はございません。主治医は入院治療をすす
めますが入院したとて致しかたありません、愚妻には面
倒かけますが、病臥十八年間の苦勞の引き続きを更に頼
むのみであります。愈々手におえなくなりましたら入院
と行きましようか。

先生方にはいろ／＼とお世話を頂きました、御好意身に
しみて有難く感謝致します。どうぞあと幾十もありませ
んでしようがよろしくお願い申し上げます。

近頃患者に癌の告知の可否につき種々論議がありますが
全く議論の余地は人によってございましょう、私はわ
かりません。私は御仏の御誓いを信じておまかせして御
念仏に生きるほかありません。御本願に乗託のひとつだ
け生きる道であります。

拝 具

七月十七日

とありました。先年慈光誌に御寄稿頂きました時も、

そこへ如来のお光が宿って下さいます。又すぐ近くには数
知れぬ程の多くの蓮の葉の上の玉の露に天上の月光がキラ
キラと宿って輝いて居ります。私はこのお光を如来のお光
と感得しただいて居り、この上なく美しく貴くながめて
おります。世の皆様のことのお心は蓮の葉の玉露の光で
あり、之を通して如来様のおまことが、私に密接してとり
まいて居ることに気づきます。天上の月と玉露は二つでも
お光は一つであります。

亡くなられた五人の方々が、私に賜った無価の尊いご好
意は如来様の光明とお慈悲の輝きてございました。ここに
謹んで故人各位のご冥福を祈ります。南無阿弥陀仏、南無
阿弥陀仏。

追 記

編 者

福田先生からこの原稿を頂きました次の日、御書信をも
頂きました。抄出させて頂きます。

……まことに恐縮に存じますが別便で拙稿をお送り申
上げました。若し御掲載下さいますれば御遺族の方々に
もお頒ちして感謝の微意を表したいと願っておりますの
でよろしくお願い申し上げます。……

又々私事をくどく／＼申し上げますが、今春以来やせる一方
でございますので、別に痛みも感じませんでしたしたが食欲

「時間のある限り、恩師や知友に御礼とお別れの挨拶のつ
もりで書信を続けて居ります」とお聞き致しましたが、長
年肺疾の療養、続いて心臓障害、かてて加えて今回の癌。
まことに生死巖頭に立たれたの念仏感謝のほとばしり、
尊き灯火を高く掲げて下さいました。本稿をお読み頂く方
に、世の常の原稿ではありませんことを知って頂くために
追記を致しました。盛岡市菜園二丁目六番八号が先生の御
住居であります。

白杵祖山師遺詠

覚悟だに要なきまでに御仏の育てたまひし恵み尊し
一息は一息ごとに死の巖頭こゆる御声は六字名号

一念即生 何ぞ敢て疑わん

無量寿仏 自ら抱持し玉う

莫遮さもあらはれ 逆悟 安危の境

唯仰ぐ 大慈 又大悲

南無阿弥陀仏



あとがき

平町の篤信者の笹井法師も亡くなられました。又山口市の末永鶴寿さんも急逝せられました。若い時、頭健な時には平気で堪えた異常氣象も、目に見えぬ暴威をたくましくして居ります。呉々も御用心下さい。

原爆記念の悲しい月がめぐつて来ました。同時に近角常音先生の御忌月であります。

この月にかつて承りました先生の御法語の断片を頂きました。皆様方のお耳にのこります先生の御法語をお頒ち下さいますようお願い申し上げます。

常観先生は御尊父常随法師の御墓にお骨をおさめられました。常音先生も同じようにお遺言されました。そして、常音先生は「兄貴がく」と常に繰り返されて全く私無きお姿で、著書二冊もおのこしになられず、恰も如信上人のおもかけがあらわれました。御恩の教々、次々と思いうかべて居ります。

異常氣象について福田鉄雄先生がお書き下さいましたが病弱者や老人にとりましては驚くほどの違和をあたえて居ります。「ツノ」の話の法信抄を頂きました四国琴

故波岡先生の「自然法爾」は先生の遺稿集から頂きました。聖人の八十六才と十八才の時、くりかえされた御法語で、釈尊の涅槃経にも相当するものであります。近角先生は、信仰円熟の至極であると讃仰されました。信徒の方々がお待ち三帖和讃の最後に掲げられたものでありますから繰り返しお読み下さい。

おのずからわが行く道は定まれりそのひとすじを行くべかりけり
汚れたる身にしあれどもきよめそぐ水
たえざれば我はやすけれ
限りなく濁れる川もそのままに海にそそぎておのずから澄む

御案内

○毎月第一、二、三日曜、午後一時半。

※一道会例会。

市電、新郊通一丁目下車、東へ一丁半。

○毎月廿四日午前、午后、昭和区小桜町。

※教西寺法話会。

市電、御器所通下車、桜花学園東側。

○八月七日午後二時、尾西市三条。

※蓮光寺修道会。歎異抄講話。

一宮駅よりバス尾西三条下車。

× × ×

定価 半年 二百円(送共)
一年 四百円(送共)

名古屋市南区甄上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷 人 本田 政雄

名古屋市南区甄上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番